昭和戦前期に見る宮崎の子どもの詩

菅　邦男

日本の教育の歴史を見ると、学校の教師だけではなく、時代時代に数多くの文人たちが文学教育や作文教育の分野を通して、直接間接的に詩教育に関わっている。それは子どものための作品の創作であったり、国語教育誌の創刊であったり、あるいは新聞や雑誌における児童作品の選評という形であったり、様々である。子どものための作品創作という意味では、夏目漱石や竹久夢二までが童謡を書いている。

児童詩（子どもの書いた詩）の分野でも、北原白秋や百田宗治を初めとして、竹中郁、井上靖、阪本遼、金井直、川崎洋等数多くの詩人たちが関係している。動機やきっかけは別としても、それぞれに、子どもの詩に魅力を感じてのことだったのであろう。

ここでは昭和戦前期までの宮崎県の児童詩の歴史を通して（それもほんの一端だが）、子どもの詩の魅力に触れてみたい。

一　『赤い鳥』時代

日本の児童詩は、大正七年七月に『赤い鳥』が創刊されたことに始まる。「芸術性に充ちた格調高い読み物を日本の子ども達に与えたい」という鈴木三重吉の思いから生まれた雑誌である。その思いと、文章の規範を子どもたちに示したいという意図もあって、書き手には当時の錚々たる作家を揃えていた。加えて、子どもたちから綴方と童謡を募集し、批評による指導ということも考えられた。綴方の選者は鈴木三重吉、童謡は北原白秋である。この童謡募集がきっかけとなって、日本児童自由詩が誕生することになるのである。したがって日本の児童詩は童謡から始まったのである。

『赤い鳥』に、子どもの書いた童謡が掲載されるのは、大正八年の四月号からである。この時既に、宮崎県から入選者が出ている。現在の都城市にある、梅北小学校の

児童の作品である。

鳥　　鎌田正直

こんなにおそくなつてから、
鳴き〳〵とほる　黒鳥、
黒い鳥よどこへ行く。
夢の御殿へまゐります。

（「第二巻第四号」）

いかにも童謡（創作童謡）という感じの作品である。「烏が夕暮れになって巣（ねぐら）へ帰る」という、この一般化した発想には、「わらべ唄」の影響が見られる。その点は他県の作品も殆ど同じで、子どもが童謡を作ろうとすれば、自然、身近にある「わらべ唄」を参考にすることになったのであろう。

宮崎県からはその四ヶ月後に同じ梅北小学校から「ひよ鳥さん」という童謡が入選している。一つの学校から複数の生徒が程なくして入選するというのは、個人的な投稿ではなく、学校を通しての投稿だったのだと思われる。『赤い鳥』の購入者名簿を見ると、数多くの教師が名を連ねている。山間部の小さな僻地校の教師たちも多い。貧しい子どもたちに代わって教師が自費で『赤い鳥』を購入し、生徒たちに読み聞かせたり、綴り方の参考にさせたり、書かせた物を投稿したりしていたのである。かつて「陸の孤島」などと言われた宮崎県において、童謡募集の最初から入選者を出し、綴方や大人の童謡欄にも入選者を出しているのには、感慨深いものがある。

ところで、北原白秋は、全国から寄せられた童謡を選評しているうちに、子どもたちにも詩が書けることに気づかされていく。童謡ではなく、明らかに詩と呼ぶべきものが、投稿作品の中に混じって来始めたのである。大正十年の末、白秋はついに童謡募集を「児童自由詩募集」へと転換させる。ここに、日本児童詩の歴史が始まったのである。

童謡募集の当初から作品が掲載された宮崎県であるが、大正時代はそれ以外に童謡・児童自由詩の入選は無い。しかし昭和に入ると、宮崎の子どもたちの自由詩が、数多く掲載されるようになる。

昭和三年の三月号には、高森通夫の「あの人」という詩が推奨で掲載されている。

あの人（推奨）　　東郷小　尋五　高森通夫

私はあの人知つてます。
私が入院してる時、
一しよに入院してました。

私は退院したけれど、
まだ〳〵入院してました。

あの人、道を通るとき、
赤ちゃんおぶつて通ります。
私を見ると笑ひます。
しづかにやさしく笑ひます。
ほゝは赤くてふくらんで、
やさしい顔をしてゐます。

（「第二十巻第三号」）

美しい詩である。「あの人」の笑顔だけでなく、優しい人柄やその裏にある生活などが彷彿としてくる。生活を背負った母親であり、同時に若い女性である「あの人」を、小学五年生がここまで描いているのである。

北原白秋はこの詩を評して「高森君の『あの人』は材料として一篇の小品にもなる内容がある。それを、すらすらと苦もなく歌ひあげてゐる。この内容はまた清純で人に微笑を催さしめる。」と述べている。この詩には物語性があるというのである。それだけ、描かれた女性のイメージが鮮明で、印象が強いということである。

作者の高森通夫は、満七歳の時に、母親を結核で亡くしている。この詩の女性「あの人」に、亡くなった母親を見ているのであろう。後年、高森は「入院している母を見舞うと涙を流すので、どうして女の人は横になると涙が出るのだろうと子ども心に思った」と夫人に語っている。

高森通夫は、尋常五年生から旧制宮崎中学校の二年生まで投稿を続け、数多くの作品が『赤い鳥』に掲載されている。いずれも叙情性に充ちた、文学的資質を思わせる詩である。

午　後（特選）

尋六　高森通夫

学校からかへつて、
ごはんをたべて出たよ。
かち栗をかじつて、おうかんに出たよ。
弟をつれて墓に行かうと思つて。
おうかんは白い、ずうつと白い。
午後、
向うで友だちが石ゆみ引いてゐる。
こちらむいて笑つた。

（復刊「第一巻第六号」）

「墓」とは、母親の墓へ詣でるのだろうか。

尋常六年生の時の詩であるが、昭和六年六月号の掲載である。『赤い鳥』の休刊前に投稿していたのであろう。

最終行の、こちら向いて笑った友だちの笑顔が極めて

印象的である。

西脇順三郎に「太陽」という詩がある。

太陽

西脇順三郎

カルモジインの田舎は大理石の産地で
其処で私は夏をすごしたことがあった。
ヒバリもいないし、蛇も出ない。
ただ青いスモモの藪から太陽が出て
またスモモの藪へ沈む。
少年は小川でドルフィンを捉えて笑った。

この詩も、最後の一行が印象的である。少年の笑顔が鮮やかに浮かんでくる。どちらの詩も一人称視点から情景が描かれ、最後に少年の笑顔に焦点化させている。同じ構成を取っているのである。小学六年生の作ながら、「午後」という詩には、西脇の「太陽」を思い起こさせるインパクトがある。

高森通夫は母親を亡くすという不幸はあったものの、村の有力者の子どもで、経済的には極めて恵まれていた。『赤い鳥』も個人で購入している。『赤い鳥』への投稿も、恐らく単独での投稿である。出身校の東郷小学校からは他に一人入選者を出しており（昭和六年五月）、教師の指導があったことも考えられる。しかし高森通夫の詩は指導したから書けるといったものではない。また病弱で欠席がち、六年生の時には全休していること、旧制中学校に入っても投稿を続けていることなどを考えると、ほぼ単独での投稿と言って良いかと思われる。

高森通夫の出身地東郷村（当時）は、若山牧水の故郷である。兄高森文夫は中原中也賞を受賞した詩人で、中也とは友人である。中也は何度か高森家を訪れている。山間部とはいえ、文化的な環境にも恵まれていたのである。そうした経済的文化的に恵まれた環境が、単独での投稿、入選を可能にしたのである。

これに対して学校単位で活躍したのが、東臼杵郡草川小学校である。昭和六年の『赤い鳥』復刊と同時に誌上に登場し、自由詩、自由画、綴方すべての分野で特選・入選を果たしている。校長以下職員全員で綴方指導に取り組み入選を果たすという、『赤い鳥』の典型的なパターンである。学校文集『草川文苑』を有し、創作を奨励している。

しづかな夜（佳作）

草川小　尋四
金丸　実

しんとした夜、
まつくらな夜、
たれも通らぬ

まよなかに、
お父さんのさけのむ
とうふかひに、
まあるい〳〵
あかぜにを
五つもつていつたんだ。

（第一巻第四号　昭和六年四月）

「しづかな夜」に見られるように、草川小学校の作品は、個人の文学的資質による成果ではない。一般的な子どもを教師が指導した教育的成果である。したがって、一人の児童が長期にわたって入選し続けるということはない。教師の指導が無くなった時点で終わりである。

これに対して高森通夫の詩は、作者の文学的資質の成果である。

昼の月（佳作）

東郷小学校　尋六
高森通夫

学校からかへるとき
見たよ、
白い大きな月を。
山の木立のそばに
半分はきえて、
昼の月はうすいな。

（「第一巻第六号」）

山村暮鳥は詩「風景　純銀もざいく」で「やめるはひるのつき」と詩った。

いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
やめるはひるのつき
いちめんのなのはな。

（第三連）

一面の菜の花畑の上に出ている昼の月、それは「病める月」だというのである。小学六年生の高森通夫も、昼の月に視線を注いでいる。「半分は消えて、昼の月はうすいな。」という見方は、病的とまでは言っていないが、暮鳥に通じるものがある。

このように、『赤い鳥』における宮崎県の児童詩には、個人の文学的資質で数多くの入選を果たした高森通夫と、教師の総力を挙げて子どもに創作を指導し、これま

た数多くの入選を果たした草川小学校という、対照的な存在があった。詩としては高森通夫の個人的な作品の方が魅力的であったが、生活綴方時代に入ると、児童自身の生活をリアルに見つめさせることで、学校での指導作品も詩として結実してくるようになる。

二、生活綴方時代

昭和四年十月に、生活綴方運動の拠点となる雑誌『綴方生活』が創刊される。鳥取県の小学校教師稲村謙一が、この雑誌に「詩を生活へ」という論文を寄稿し、それが児童詩の流れを大きく転換させることになる。

稲村は、それまでの児童詩が「ブルジョア的、宗匠的、隠遁的、非生活的な態度」に陥っているとし、「生活の中に詩を見出し、詩を生活の中に生む」ことを提案する。ここに「生活詩」と呼ばれるものが誕生してくる。

この生活綴方時代にも、数多くの宮崎の子どもの詩が、中央の雑誌に掲載されている。

昭和七年頃、東臼杵郡平岩小学校（現・日向市）に蓑部哲三という若い教師がいた。雑誌『綴り方倶楽部』に、「かやきり」という指導作品が掲載されている。

かやきり

平岩小　尋五

溝口初知

尾鈴山まで
はれた
かや山
お父さんが切ると
雪のやうにふつてくる
お母さんが切ると
雪のやうにふつてくる

両親の働く姿を捉えたものだが、叙情性がある。

この詩は百田宗治著『批評と添削　小学児童の詩』（昭和九年　厚生閣書店）に巻頭一頁を割いて再録されている。

百田はこの詩について長文の評を書いている。

「何といふ美しい詩であらう。詩の心も美しいし、多奇を弄しないで、同じ言葉を繰返してゐるのも何処やらにさし迫らぬ優雅さがあり、荘重でもある。観たまゝ感じたまゝを率直に書いたとか、巧みに書いたとか、或はまた綺麗に書いたとかいふだけでない、この詩にはほんたうの詩の美しさといふものがあらはれてゐると思ふ。

かういふ詩の美しさは、いふまでもなく、同時にかういふ詩を書いた心の美しさである。」

百田宗治が、児童詩としてというよりも、一篇の「詩」として心を動かされたことが分かる。

蓑部はその他にも感性豊かな指導作品を、数多く『綴

り方倶楽部』等に掲載させている。

川

美々地小尋四
持田ヒサ子

川へ
担ちやんをむかひに行つたら
担ちやんはゐない
川の音が聞える

蓑部が昭和九年に転勤していった美々地小学校は、当時、槙峰鉱山で栄えた山間部の学校である。現在は総児童数二七名の小規模校だが、当時は数百名の児童がいたようである。

学校の下には、山と山との間を巨大な石がごろごろしている川が流れている。この川に弟か妹である「担ちやん」を迎えに行ったのである。

川に居ると思って呼びに行ったのに、「担ちやん」は居ない。川音だけがこだましている。居ることを予定していた人物が居なかったが故に、川の音が聞こえるのである。居れば川が音をたてて流れていても、それはいつものことで気にはならない。そうした情感を、最後の一行「川の音が聞える」で表現し得ている。

美々地小学校でも蓑部哲三は熱心に詩の指導にあたっていたが、転勤した年の半ばに、僅か二十七歳で退職に追い込まれている。腰椎カリエスである。蓑部は、当時、次のような歌を詠んでいる。

退職をすすめに来しと知りしとき
思はず膝に涙落ちたり

腰椎カリエスを病んで下宿に寝ている時、訪ねて来た校長に退職を強要されたのである。

同じように、若くして教職を去った指導者に、佐藤実という教師がいた。昭和九年に西臼杵郡上野小学校（現・高千穂町）で、三年生の文集『芽』を発行していた。この文集からは、当時出版された『日本児童詩集』に、「おとうさん」という詩が採られている。

おとうさん

上野小尋三
馬原重利

おとうさんが
ばしやひきからかへつてきた
のこくづのあせが
ながれてゐる

上野は熊本県境にある山間部の村で、この子の父親は、山から木材を切り出す仕事をしていたのである。鋸屑にまみれた肌に流れる汗、それがすべてを語っている。情

感を言葉で語らせることは子どもには難しい。それを父親の姿を写実させることで語らせているのである。要は何を見つめさせるかにある。

写実的な詩は、時には大きな意味を含ませて見せる。

にうえいへいのこくき

上野小尋三
佐藤利久

町の下の方に
こくきが一本たつてゐる
そのわきに
とたんぶきや　かやぶきの家が
なんげんもたつてゐる

山の中腹にある小学校から町を見下ろして書いた詩である。入営という名誉の象徴である国旗が、貧しい家々を圧して輝いている。見ようによっては、一本だった国旗が次第に二本となり三本となり、他の屋根へと移っていく無気味さを感じさせもする。むろんそれは、戦争のその後の展開を知っている今日から見ての話ではある。しかしいずれにしろこの詩は、そういう多様な思いを抱かせる情景を描ききっている。

子どもが日常の中に非日常的なものを見い出す時、それへのいぶかりが詩として写実的に描かれ、読む者に多様な思いを抱かせるのである。

佐藤実は翌年、同郡の押方小学校に転勤するが、結核のため一学期のみで休職、そしてそのまま学校に戻ることはなかった。十二月に橋の上から身を投げたのである。まだ二十六歳という若さであった。

この佐藤実と郷里が同じで、師範学校でも同期だったのが山崎梅夫である。上野小学校と同じ西臼杵郡の山間部の学校、鞍岡小学校で文集『土の子山の子』を発行していた。厳しい環境の中で生きる子どもたちを前にしていたからか、山崎の指導作品には労働や生活（家計）への視点が感じられる。

秋の夜

鞍岡小尋六
西山　晴

うす暗いランプがともつてゐる
たき火がとろ〳〵燃えてゐる
内の人はみんなだまつてゐる

家族で火を囲みながら、昼間の労働の疲れからか誰も口をきかない。厳しい冬を前にした、秋の夜の農家の一齣である。

この外、多くの生活綴方教師がいるが、そのリーダー格だったのが、木村寿である。東臼杵郡の土々呂小学校

（現・延岡市）という海辺の学校で出していた文集『光』によって、当時全国的に有名になった実践家である。

昭和七年に一年生の男組（五十人余）を持ち、以後三年間持ち上がりで担当し、その間文集『光』を発行し続ける。三年間で二十三号という、ガリ板刷りの膨大な量の文集である。三年生三学期の文集は、一冊が二百頁を越えている。

木村の綴方教育は、子どもたちに「自分の良さ、個性に気づかせる。家庭や村を見つめさせ綴方に描かせる」、綴ることで「物を見る目」を養い、問題に気づかせ、自分や村の生活を変えていく、というものであった。

したがって文集『光』には、子共たちの故郷である土々呂や自然を描いた詩が多く掲載されている。そんな中に、次のような詩がある。

からす

土々呂小尋一　谷　勇一

からす
でんしんばしらでないてゐる、
とんぺしでないている、
とんぺしにお日さまがしづむよ、
かあかあとないてゐる、
やのせんせいが　しんなつたよ。

一年生の詩だが、最後の一行が効いている。「しんなったよ」は「死になった」つまり亡くなったの意味、「とんぺし」は、てっぺんの意味である。

百田宗治は『小学児童の詩』にこの詩を収録し、長文の評を付けている。

「それよりも興味が深いのは、最後の一行『やのせんせいが　しんなつたよ』即ち矢野先生が死になすったよである。この一行を終りにつけ加へたところ、もし指導者の何等の手が入つてゐないとすれば（児童の情感がそのまゝ発露されたものとすれば）、期せずしてまことに巧妙な詩術が働かされてゐると見なければならない。（略）『やのせんせいが　しんなつたよ』は云ひ換へれば、主観を露出しないどころか、大々的な主観露出の表現であるかも知れぬ。外の言葉を知らないで、この一行を圧倒的に書き下したものであるかもしれぬ。それなればこの児童の真実に充ちた気持がこの作品を産み出したのである。〔しんなつた〕の素朴な地方的表現がそれに預かつて力あることも素よりである。」

百田宗治の言う通り、表現としては客観的な事実の叙述でありながら、「やのせんせいが　しんなつたよ」で、すべてを語り尽くしている。百田の言葉を借りれば「主観を露出しないことで最大限に主観を露出」している。

木村寿によると、この詩は棺を見送った直後の作だという。「矢野先生は、この子どもの家のすぐ下に久し

く住まつてゐただけに親しさは他の子どもよりも深かつた」のである。

「葬儀の日、古里に帰る矢野先生の棺を子どもは母なる人と共に見送つてゐた。影が見えなくなる迄も見送つてゐた。門口に集つて矢野先生の生前を語つて見送つてゐた。村の人々の淋しさを増すかのやうに烏がないた。見上げると沈みかけた夕陽を浴びて、烏が鳴いてゐる。人々は思はず、『矢野先生も死んなつたね。』涙を浮かべながらつぶやいた。作者も、矢張りさうした悲しさと淋しさが、胸いつぱいになつて来るのを禁じ得なかつた。かうした生活の背景の中から、その詩は生れたのである。」

木村寿は当日の様子を述べながら、「指導者の手が入つた」ことを否定している。子どもの「真実に充ちた気持」によって「期せずしてまことに巧妙な詩術が働かされた」（百田宗治）のである。

きりの山

土々呂小尋三
川名信一

僕たちののぼるあたご山
きりがはつてゐる
するつと流れてゐる
きえて又あつまつてくる
あのきりの中にのぼるのだよ。

遠足で愛宕山（延岡市・標高約五百メートル）に登った時の詩である。この詩も単なる写生ではなく、「あのきりの中にのぼるのだよ。」と、最後に一行付け加えることで、ちょっとした冒険心、好奇心、それに一抹の不安が言外に語られている。

『綴り方倶楽部』や百田宗治の著書等に数多く指導作品が掲載され、文集『光』の名を全国に知らしめた木村寿は、当然その後も土々呂小で指導していくつもりであった。ところが、三月になって、突然転勤を言い渡される。転勤して行った学校も一年で転勤、更に次の学校もまた一年で転勤。「生活綴方」教師故の転勤である。昭和十五年の二月には、山形県の教師が検挙されるという、いわゆる生活綴方事件が起きている。木村寿はその十五年の一学期終了後、「教育界の空気が嫌になった」という言葉を残して辞職している。

宮崎県の生活綴方教師には政治的な背景は全くなかったのだが、昭和十五年という時代的なものが、生活綴方教師を追いつめていったのである。

神話の里宮崎を初めとして、紀元二千六百年行事で沸き返る中、中央の雑誌も戦時特集を組み始める。写実的な手法を用い、物事をリアルに見つめさせることで数々の優れた詩を生み出した児童詩教育も、ここに幕を下ろすことになるのである。